

学ぶ意欲を高め、かかわり合う力を育む生活科の学習

1 はじめに

「生活科の特質は、“直接体験を重視した教育”“個性を生かした教育”にある。また、生活科の基礎・基本は、子どもが身近な人々、社会及び自然と直接関わる中で行われるところの具体的な活動や体験である。」と嶋野道弘氏は、述べている。

子どもは、生活の場である学校や家庭、地域の中で、具体的な活動や体験を通して基本的な生活習慣や生活技能を獲得するとともに、自然や社会、人々とのかかわり方を学び、自己の実現に向けて成長を続けている。生活の主体である自己の存在を認識するとともに、より豊かに自分らしく生きるためには、子ども自らが主体的、創造的に生活できるための力を、学習を通して育成する必要がある。生活科は、主体的に生活しようとする意欲、豊かな表現力、よりよく生きる生活技能を育て、気づきを広げ深めることを通して、「生活に生かす力」を子どもに自ら獲得させることをねらいとしている。

2 本校生活科の取り組み

(1) 生活科学習のねらい

本校の研究テーマにある「実践的な行動力」とは、「基礎・基本に支えられた知識や理解を生かし、自分を生かすために、自然、社会、人、に積極的に働きかけようとする行動力」である。本校の生活科においては、「自分なりに課題を見つけ、主体的にかかわろうとする力」「かかわりの中から気づきを広げ、深めようとする力」さらに、「自己の願いや思いを豊かにし、生活に生かす力」を育てたい力と考えている。

これは、本校が副題に掲げている「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」につながっている。

(2) 教科カリキュラムの編成

○幼・小・養・小との連携、交流を生かして

低学年の子どもは、活動や体験を通してながら思考し、知識や生活する知恵を獲得していく。したがって、カリキュラム編成にあたっては、この時期の子どもの興味や関心を大切にしながら価値ある活動や体験を設定する必要がある。

また、幼児期からの移行期にあたる第1学年においては、学校への対応を考慮した活動や「遊び」を中心に位置づけた活動を設定することにした。そして、幼稚園との連携を図り、相互のカリキュラムを見直し見通しをもった実践をしていきたいと考えている。第2学年においては、附属養護学校との連携、交流を図りながら、ともにふれあい活動する中で、相手を理解し認め合う仲間づくりを目指している。

○活動の連続、広がり意識した異学年交流

2年間を見通し、学習が関連をもって継続発展していくよう、第1学年では、「なかよし」、第2学年では、「わくわくふれあい」という学年テーマを設定し、子どもの学習意欲を高めながら活動の広がりや高まりを求めている。「学校探検」「朝顔の種送り」「ふれあい遠足」「わくわくフェスティバル」など、1、2年がともに学習する場面の設定をすることで、目的と必然性をもった活動の展開を期待している。

3 授業づくりの視点

(1) 活動からのアプローチ・課題からのアプローチ

本校では、「学ぶ意欲」を高めるためには、子どもたちの「知的好奇心」を満たす授業を展開していくことが大切であると考えている。子どもたちが充実感と満足感を感じることができるような『活動』を設定し展開することができれば、その活動の中で子どもたちは「学ぶ意欲」を高めていくことができるだろう。

また、「活動」から一人一人が見出した新たな『課題』をじっくりと追究するなかで、子ども自身が学び方を学んでいくことにもなる。目標達成に向けて、「もっと知りたい、もっとこうしてみたい」といったさらなる学ぶ意欲の高まりが、新たな「活動」「課題」を提起し、「学び続ける力」にもつながっていくと考え、授業づくりに取り組んできた。

(2) 「支援」

子どもの知的な気づき、活動の質の高まりを支えるものは、教師の「支援」であるという考えに立ち、全体の場での支援、個に対する支援のあり方を探ることにした。その中で特に、

- ・ 子どもたちの「気づき」に対する「見取り」を丁寧にし、どのように働きかけていくのか。
- ・ 一人一人がしっかりとした目的意識をもって活動に取り組めるような学習場面の設定のあり方
- ・ 子ども同士がお互いの課題や思いを共有し合う中での支援のあり方について探っていくことにした。

(3) 人とのかかわり合う体験の重視

生活科では、子どもの生活圏を学習の場や対象にしており、そこには、様々な人々が協力しながら生活をしている。子どもは多様な人々とかかわることによって自分と異なる人がいることに気づき、ともに活動する楽しさやよさを味わうことができる。具体的な活動や体験を通して、知識と生活の結びつきを図っていくこともできる。人々が自分にとってどのような意味をもつのか、自分とのかかわりを見つめ、ともに生きていこうとする態度にもつなげていきたい。さらに、自分とのかかわりを追求していくなかで、自分自身、友だち、学級、学年、学校、家族、地域、社会へとかがわりが広がり、自己認識を深めることにもつながっていくと考える。



授業研究会で明らかになった成果と課題

自評

- ・子どもたちに目的意識を持たせたかった。1年生の役をした子であれば、2年生の改善点を指摘しながら、場の設定や声のかけ方、笑顔や雰囲気にも気づかせ、次の活動に活かしたかった。
- ・各コーナーで話し合いを持ち、試してみようと言葉かけをしたが、活動の中で軌道修正は見られず、支援の難しさも感じた。自然な気づきや活動への意欲につながる支援はどうあればよかったのか。
- ・自分たちのコーナーのことだけに意識が集中し、コーナー間の橋渡し役など、フェスティバル全体に対する児童の気づきが少なかった。

協議

- 程度の差はあれ、目的意識はもてていたのではないか。
 - 工夫への気づきは作る場面での方が多く見られるのではないか。1年生を強く意識して作ったり、他のグループのよいところを取り入れて作ったりしていた。
 - 教師の意図として、「もっと楽しいフェスティバルにするために」話し合いをしたのだが、次に向けてどうすればいいのか、時間をかけてもっと深めていきたかった。
 - 話し合いで改善点を出していたが、個の気づきを引き出す他の手だてや工夫があればいいと思った。例えば、「困ったカード」や「教えてカード」などを活動の中で書ける場があるなど。
- 教師の意図をもとに、支援をしていけばよいのではないか。
- 話し合いの場面で、みんながかかわれるような支援について、今後考えていく必要がある。
- 本時の「活動」のとらえと、本校の「活動」のとらえが一致しているか、改めて見直していく必要がある。
- 活動における子どもたちの様相をどう見取ったのか、明らかにしていかなければならない。

5 成果と課題

- ・「課題からのアプローチ」としての授業のあり方を今後摸索していきたい。ただ、活動の中から課題が生まれ、さらに新たな課題を追求するために知的な活動へと高めていくという授業像が少しずつではあるが、見えてきた。
- ・いろいろな人との出会いやかかわりの中で、子どもたちは相手の立場に立った接し方を学んできつつある。また、今までは与えてもらうといった受身的な学びの姿勢から、自分たちから「かかわろう」「学んでいこう」という姿勢が見られるようになってきた。
- ・3の(2)で支援について挙げたが、今後も全体での話し合いの中で課題の本質に迫る発問によって支援しつつ学びの質が高まるように授業づくりをしていきたいと思う。
- ・個への支援では、振り返りカード・発見カードをていねいに見取り、その一人一人の課題追究の過程で適切な助言をしながら、価値ある学びとなるよう支援していきたい。
- ・1, 2年の生活科の学びが、総合的な学習の学びの土台となり系統的に発展していけるよう、全学年と連携を図り、見通しをもって生活科学習に取り組んでいきたい。

(参考文献)

- 内藤博愛 気づきを深める生活科授業の創造 明治図書 2005
- 嶋野道弘 新学習指導要領を生かした生活科の授業 NO.1, NO.2 2001

4 授業の実際と考察

第2学年1組 生活科学習指導案

2006年9月25日(月)

授業者 新 康江

1. 単元名 「わくわくフェスティバル」へようこそ

2. 授業構成

(1) 教師と教材

本単元は、学習指導要領の次の内容に位置づけられている。

(6) 身の回りの自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして遊びを工夫し、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。

子どもたちは、遊ぶことが大好きであるが、普段、家庭ではゲームやカードなど既存のもので遊ぶことが多くなってきている。1, 2年生が遊びを通して交流することは、人間関係を築いていく上でも貴重な体験となるはずである。いろいろな人とふれ合いかわり合う中で、自分や友だちのよさに気づき、相手を思いやることや協力することの大切さを実感してほしい。そして、一つの活動をみんなでやり遂げる充実感も味わわせたいと考えている。本単元では、異学年や学級・学年の友だちとの交流、共同作品づくりを大切に、自分たちでフェスティバルを企画実行し、ともにかかわり、遊ぶことの楽しさを体感できるように構成している。また、1年生への参加の呼びかけ、祭りの準備や会場づくり、当日の運営、後片付けなどを通して、より実践的な行動力を培うことができると考えている。

本時は、今まで子どもたちが計画し準備してきたフェスティバルのリハーサルを体験する中で、よりよいフェスティバルにするために、これから何をどう工夫していけばよいかを探っていきたい。したがって、「活動」からのアプローチとして授業を構成することにした。

(2) 子どもと教師

本校の生活科では、「自分なりに課題を見つけ、主体的にかかわろうとする力」「かわりの中から気づきを広げ、深めようとする力」を育てたい力として考え、学習活動に取り組んでいる。子どもたちが、「かわる」ということは、興味・関心の表れであり、この「かわり」を通して知的な気づきが生まれてくる。つまり、本校のめざす「生活にいかす力」の基盤となるものであると考える。

本学級の子どもたちは、活動的で興味あるものへは関心をもち、生き生きと取り組む。今まで、附属養護学校の友だちとの交流では、「チャプチャブランド」に招待され、一緒に遊ぶ活動も経験してきている。しかしこの交流では、「自分からすすんでかわろうという姿がなかなか見られなかった。」という課題も残った。また、本単元と関連して子どもたちは国語科で、1, 2組がお互いに招待し合い「おもちゃまつり」を開くという活動をしてきた。その活動の中で、喜んでもらえたという満足感と「せっかく作った遊びを自分たちだけでなく他の学年にも楽しんでもらいたい。」という思いを引き出すことができた。1年生とは入学当初の学校案内やふれあい遠足で交流はしてきたが、本格的に学習に招待することは初めてである。そこで、本単元では、「みんなが協力し工夫をすれば、もっと楽しくなる」という思いを味わわせるために、グループ活動を中心に単元を構成することにした。そして本時では、もっと楽しいフェスティバルを実現させるために、十分な話し合いを行い、工夫すること、また努力しなければならないことをしっかり自覚させたい。また、一人一人が活動を通しての新たな気づきを活かし、整理し、見通しを持つことができればフェスティバル本番へ向けての活動への意欲も高まるであろう。

(3) 子どもと教材

本時の活動では、子どもたちがフェスティバル本番に向けて準備してきた担当コーナーを1年生役と2年生役とに分かれて模擬体験をしていく中で、子ども自身が招待する側、される側両方の立場に立って何をどのように工夫し、改善したらよいかを考えさせたい。より知的な活動へと高めていくために、友だちと対話する場を多く設けたい。活動の中で子どもたちは、1年生にわかりやすく遊び方の説明をしたり、上手く出来たときは一緒に喜んだりすると1年生が楽しく遊べることに気づいていくと思われる。また、みんなが仲良くきまりよく遊べるようなルールや約束をしっかりと伝えておかなければならないことも、かかわりの中で感じ取らせていきたい。また、場所のセッティングはみんなが楽しめるものになっているか、試行錯誤しながら子どもたち自身が追求していくよう見守りたい。フェスティバルは各コーナーで成り立っているが、スタンプラリー形式で1年生がまわっていくので、自分たちのコーナーをPRするだけでなく、次のコーナーへ案内するなど、全体を見通した心配りにも気づかせたい。このように、実際に遊びを体験しながら、「もっとこうしてみたら」というアドバイスを各グループが交流し共有することで、新たな気づきやアイデアを生み出すことにもつながっていくと考える。

さらに、雰囲気明るく笑顔で進められているグループをほめることで、わくわくフェスティバル本来のねらいを確認し、みんなの思いを一つにしたい。また、一人一人のこだわりやアイデアがグループの友だちに受け入れられず、うまく活動できていないグループには、お互いの思いを聞き合い、対話をさせながら協力し合うよう促していきたい。声をかけたり、問いかけたりしながら、遊びの発展を見取り、1年生を意識したかかわりができるよう支援していきたい。そして、自分たちの思いや願いがいつまいったフェスティバルにするために、子どもたちの発想や願いを尊重することを第一に考え、活動を支援していきたい。

3. 単元目標

- 身のまわりのものに関心を持ち、計画や製作に進んでかかわり、1年生と楽しく交流しようとしている。 [生活への関心・意欲・態度]
- 「わくわくフェスティバル」を成功させるために、遊びを工夫し、自分なりの思いや願いをもって活動したことを表現することができる。 [活動や体験についての思考、表現]
- 友だちと協力して「わくわくフェスティバル」をつくり上げていくことの大切さや、そこでの自分や友だちのよさががんばりに気づくことができる。 [身近な環境や自分自身への気付き]

4．学習計画（全１７時間）

第１次 わくわくフェスティバルの計画（２）

第２次 フェスティバルの準備（１２）

- ・ 招待状の作成（１）
- ・ おもちゃコーナーの作成（６）
- ・ もっと楽しいフェスティバルに（２／３）・・・本時
- ・ フェスティバルの会場づくり（２）

第３次 フェスティバルの実践（３）

- ・ １年生と楽しく遊ぼう（２）
- ・ 活動を振り返ろう（１）

5．本時の学習について

（１）本時の目標

- ・ 招待する１年生がもっと楽しく遊べるよう工夫したり、１年生とのかかわり方を考えたりしながら活動することができる。

（２）本時の活動

- ・ １年生の立場に立ち、もっと楽しいフェスティバルにするために何が必要か考えながら活動する。
- ・ ２年生の立場から、１年生に楽しんでもらえるよう工夫し、友だちと協力しながら活動する。

（３）期待される児童の様相

- ア １年生が楽しく遊べるように、わかりやすく遊び方の説明をする。
- イ １年生みんなが仲良く楽しめるようなコーナーの場所や環境づくりをする。
- ウ １年生のことを考えた声かけをすすんでする。

(4) 本時の展開

学習活動	教師の支援 (全体 個) ・ 意図 (○)
1 . 前時までの活動を思い起こし、本時のめあてを確認する。	○前時を振り返り、出てきた工夫や友だちとの協力を紹介し、活動への意欲付けを図る。
もっと楽しい「わくわくフェスティバル」にしよう	
2 . 「わくわくフェスティバル」のリハールを前半・後半に分かれて、1年生役と2年生役に交代して行う。 ・ 輪投げコーナー ・ たからつりコーナー ・ 金魚すくいコーナー ・ こまコーナー ・ ボーリングコーナー ・ き地コーナー ・ まとあてコーナー ・ とばしコーナー	○教師も他の児童と一緒に活動することで活動の発展への意欲付けを図る。 1年生役の児童には、1年生になったつもりでどんなことを思い、どんな反応をするかイメージするよう働きかける。 教師は、工夫・発展だけでなく、友だちと楽しく遊んでいる活動の輪の中に入り、児童のかかわりのよさを表情、対話、動きから見取っていく。 グループ活動の中で、うまく友だちとかかわれない児童には、声をかけ役割を確認させたい。グループのリーダーにも声をかけ、協力しながら進めるよう促す。
3 . 活動を振り返り、自分たちの課題を話し合う。 ・ 1年生にわかりやすく工夫して説明をしてみた。おもちゃまつりのときより、短くまとめた。 ・ 1年生が楽しめるような声かけを意識してみた。 (応援する、案内する、相談にのる、励ます、ほめる) ・ みんなが仲良く遊べるような場所づくりを考えてみた。	○もっと楽しいわくわくフェスティバルにするために、どこをどう改善していけばよいか、具体的に考えさせたい。 ○同時に、工夫やがんばりについても引き出したい。そのために、児童のよさが想起できるよう、実際に1年生役、2年生役となって再現しながら発表できるようにしたい。 活動の中でどのような声かけを意識していたのか、かかわりのなかで何を感じたのか問いかけをしておき、話し合いの際、想起させ話し合いを深める。
4 . グループや個人のめあてが達成できたか振り返る。	振り返りカードに今日の活動をまとめ、もっと楽しい会にするために自分たちにできることを確認させる。
5 . 次時の学習内容を確認し、見通しをもつ。	○友だちとの新たな活動の広がりや発展を期待していることを伝え、次時への意欲づけを図りたい。